

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 手遊び歌実演方法による子どもの夢中度の違い： 熟達保育者と非熟達保育者の比較

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-03-29 キーワード (Ja): 手遊び歌, 熟達保育者, 非熟達保育者, ノリ, 宙吊り キーワード (En): 作成者: 中野, 圭祐 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002001529">https://doi.org/10.57529/0002001529</a>

# 手遊び歌実演方法による子どもの夢中度の違い

## —熟達保育者と非熟達保育者の比較—

中野 圭祐

### 【要旨】

手遊び歌は保育者にとって欠かせない教材の一つである。その手遊び歌実演の際、保育者によってテンポに揺らぎが生まれたり、アドリブや間が取り入れられたりすることもある。これら実演方法によって子どもにはどのような影響があるのだろうか。本研究では、熟達保育者と非熟達保育者の手遊び歌実演方法による子どもの夢中度の違いを調査した。その結果、1コーラスから5コーラスまでである手遊び歌の全てのコーラスにおいて、熟達保育者のクラスの子どもの夢中度が、非熟達保育者のクラスの子どもの夢中度と比較して有意に高かった。熟達保育者は手遊び歌の実演の際にアドリブを取り入れることによって、ノリの共有と宙吊り、宙吊りの解消という遊びの構造が生まれているのに対し、非熟達保育者は一定のリズムで手遊び歌を実演するために遊びの構造が生まれていなかった。これにより、手遊び歌実演の際にノリの共有と宙吊りが起こることによって子どもの夢中度が高くなることが示唆された。

### 【キーワード】

手遊び歌 熟達保育者 非熟達保育者 ノリ 宙吊り

## 1. 序

### 1) はじめに

手遊び歌<sup>1)</sup>は、近年多くの楽譜や教材集が出版されるだけでなく、インターネット上の動画投稿サイトなどにも数多く実演とともに紹介されている。保育者にとって、日々行う手遊び歌への関心は高く、保育を行う上での基礎的で重要な教材の一つであると言える。

手遊び歌は身体のみを使用してどこでもすぐに取り組むことができるため、保育の中でも多く取り入れられている。笠井ら（2015）によれば保育士・幼稚園教諭の95%が保育に手遊びを取り入れている。加えて笠井らは手遊びが取り入れられる場面について83%の保育者が、保育の導入として使用していることを明らかにしている。これは、手遊び歌が何か他の活動を始める前に子ども達を落ち着かせたり静かにさせたりする前座として使用されていることを表している。これについては岩田（2015）も「集会場面などの一斉活動場面において行われる手遊びは、集会時に行うルーティーン的活動として考えられているか、あるいはその後の活動（絵本や紙芝居の読み聞かせ、保育者の話など）の導入程度にしか捉えられてこなかった」としている。しかし、手遊び歌には「遊び」という言葉が含まれていることから分かる通り、遊びの要素を持っており、

手遊び歌そのものが子どもにとって楽しいものである必要がある。保育者と子どもがリズムを揃えて歌ったり、保育者の動きを真似て動いたり、指や手を見立てて動かしたりしながら、相互に気持ちを通わせる楽しさを味わうことが重要である。

つまり、手遊び歌を保育者が実演する場面において、ただ単に活動の前座として、もしくは子どもを統制するために扱われるのではなく、音楽的な楽しさを子どもと共に味わうためには、手遊び歌の効果的な実演方法などの技術を身につけていく必要があると言える。

手遊び歌の実演方法について、筆者は保育者の実演の記録から、保育者が楽譜には示されていない間（ま）を取ったり、子どもとのやりとりを挿入したり、アドリブを入れたりするなどの細やかな配慮をしていることを明らかにし、手遊び歌を子どもの前で実演する際の人的環境としての保育者の重要性を示した（中野、2024）。その中で、10年以上保育経験のある熟達保育者と1年目の非熟達保育者では実演の方法とその意図に違いがみられたが、両者を直接比較した考察は深められていない。

保育経験の長い熟達保育者と、経験の浅い非熟達保育者では、手遊び歌の実演においてどのような違いがあるのか、また、その実演方法の違いで子どもの姿は異なるのか、これらについて検討をすることで、保育者の手遊び歌実演の方法が子ども達に及ぼす影響について考えたい。

## 2) 手遊び歌におけるノリ

手遊び歌の実演について論じる前に、手遊び歌の持つ構造とその効果について押さえておかなければならない。

岩田（2017）によれば、手遊び歌は「定形化された〈うた〉（セリフなどの〈かたり〉が入ることもある）と主に手を中心とする上体の動きによる〈ふり〉（あるいは〈まい〉）によって、保育者と子ども達が「見る－見られる」の関係の中でノリを共有しつつ〈ふり〉の見立てを共有する遊び」であるとされている。さらに「ノリ」について岩田（2008）は「「ノリ」という言葉は、能楽では専門用語として用いられ（ことばの拍と拍子の拍が一致すること、とおおよそ言って良い）、日常語ともなっている。「ノリ」とは、関係的存在としての身体による行動の基底にあるリズム、およびその顕在の程度、すなわちリズム感、また、身体と世界との関係から生み出される調子、気分、雰囲気のことである。「ノリ」という言葉を用いることによって、「リズム」という言葉で言い表すのが不自然であることも表せるようになる。」としており、ノリを共有するとは「身体的に同調すること」であり、単に歌のリズムが合うということとは異なるとしている。

手遊び歌の演じ手である保育者は子ども達に手遊び歌を見られると同時に子ども達の様子を見ている。同様に子ども達は保育者の手遊び歌を見る立場と保育者に自分たちの楽しんでいる様子を見られる立場という関係性がある。この関係性の中で、手遊び歌のノリが保育者と子ども達との間で共有され、身体的同調が起きることが、手遊び歌の特徴であると言える。

### 3) 手遊び歌における「宙吊り」

また岩田（2017）は、手遊び歌には「宙吊り」（西村、1989）が仕組まれている、とも述べている。「宙吊り」は西村（1989）の示す遊びの4つの祖型（「ふれあいの遊戯関係」「宙吊り」「同調」「役割交代」）から引用されており、西村は、「宙吊り」を、（遊びに関わる）「両者の間に共有された期待」と、「次の瞬間には確実に充実されるはずの、猶予としての不在」があり、その猶予としての不在により、期待が「宙吊り」にされる、として説明している。これは遊びの最も中核をなす構造の一つであり、いわゆる「いない、いない、ばあ」なども、この「宙吊り」が顕著に現れる遊びである。「いない、いない…」で親が顔を両手で覆う間、子どもは次に起こるであろう「ばあ」を期待して待っている。この時、親も子どもも、次の「ばあ」により互いの笑顔が現れることを期待しつつ、「いまか・いまか」「もうちょっと・もうちょっと」と「宙吊り」にされた期待を楽しんでいる。そして「ばあ」と顔が見られた状態で「宙吊り」になっていた期待が満たされるのである。岩田はこの「宙吊り」が手遊び歌にも含まれているとし、手遊び歌の中でも、ある種の手遊び歌ではノリの共有と、そのノリの中断（宙吊り）、そしてノリの回復（宙吊りの解消）が行われるとしている。

また、岩田（2008）は、手遊びを保育者が一斉活動的な場面で積極的に行うことはクラス集団のノリの共有度を高め、クラスが凝集性の高い集団として形成される可能性が高いことも示している。岩田（2017）は、ノリの共有の「宙吊り」が顕在化する手遊びの場合、保育者のモデル性が他の手遊びより高くなり、保育者と子ども達が共同に生成するノリが原則的に保育者のノリによって統制されるとし、またそれゆえにノリの共有が「宙吊り」にされる場合、「宙吊り」の解消は、保育者が主導権を持つことになるとしている。またそうして保育者と子ども達のノリの共有が蓄積されることでクラス集団のノリの共有度が高まる。その結果、今度は子どもがノリを主導することも可能になり子どもの主導性が高まっていき、クラスが凝集性の高い集団となっていくとしている。

これに基づけば、保育者が手遊び歌を行う中で子ども達とノリを共有し、宙吊りとその解消が起きるような実演を行うことで、子ども達は自然と保育者に集中し、手遊び歌そのものに夢中になると考えられる。逆に、手遊び歌を実演していたとしても子どもと保育者との間でノリの共有が行われていなければ、手遊び歌そのものを子どもが楽しんでいることにはならないと思料する。

### 4) 熟達保育者と非熟達保育者の手遊び歌実演の違いについて

保育の現場には熟達保育者ばかりではなく、当然非熟達保育者も多い。特に養成校卒業後の新人保育者などは大勢の子ども達を前にしてクラスの活動を行うことそのものに慣れておらず、加えて手遊び歌を実践する経験も浅い。また経験年数があったとしても子ども達と楽しそうな手遊び歌の時間を作ることができる保育者とそうでない保育者もいる。同じ手遊び歌の実演でも、子ども達が楽しく夢中になっている保育者とそうでない保育者がいるのである。

筆者のこれまでの研究（中野、2024）では、手遊び歌実演の際に保育者によってテンポの揺らぎが起きたり、間の取り方やアドリブの有無などの違いがあったりすることを示したが、その違いによって子ども達の姿がどう変わるのかについては言及していない。筆者は、保育者による手遊び歌実演の違いと子どもの姿には、岩田の言うノリが関係しているのではないかと考える。これらの保育者の実演の違いによって、ノリや、宙吊りの状態に違いが生まれ、子どもの姿も変わってくるのではないかと思料する。

岩田は、教師が子ども達のノリを読み取り、子ども達のノリを喚起し維持するような身体的パフォーマンスにより、クラスの音楽活動から逸脱していた子どもが音楽活動に参加するようになることを示したり（岩田、2008）、幼稚園教諭が実際に手遊び歌を子どもの前で実演する場面から、教師がどのように子どもとノリを共有しているのかを示したり（岩田・小川、2015）してきた。しかしこれらは熟達した保育者の姿から得られたものであり、非熟達保育者がどのように手遊び歌を実演しているかを検討したものではない。非熟達保育者が行う手遊び歌と、熟達保育者が行う手遊び歌の実演の違いを、ノリの共有と宙吊り、その解消、に着目しながら明らかにすることは、これまで単に活動の前座として捉えられてきた手遊び歌実演の際の保育者としての留意点や、保育者養成校での指導のために意義のあることであると考えられる。

## 2. 研究の目的と方法

### 1) 研究の目的

本研究では、熟達保育者と非熟達保育者の手遊び歌実演の方法が子どもの姿に与える影響を明らかにし、手遊び歌実演の際の留意点について考察することを目的とする。

### 2) 研究の方法

#### (1) 調査期間

・令和6年1月25日、2月5日、2月15日 の3日間

#### (2) 調査対象

東京都T幼稚園

3歳児クラス1クラス、4歳児クラス2クラス、5歳児クラス2クラス、計5クラスの手遊び歌実演場面を、3日間のうち、2回ずつ観察した。その中で、同じ曲目の実演のあった3歳児T組（熟達保育者A）と4歳児F組（非熟達保育者X）の手遊び歌を対象とした。研究に際し、筆者からは手遊び歌の具体的曲目の指定は行わなかったが、条件として、「手遊びに歌が含まれるもの」という指定をしたところ、T組とF組にて同じ曲目である『ペンギンマークの百貨店』作詞・作曲／犬飼聖二（図1）が実演されたため、この2クラスを対象とした。保育者Aは幼稚園での勤務経験が22年目であり、保育者Xは幼稚園での勤務経験が1年目であったため、保育者A

を熟達保育者、保育者Xを非熟達保育者として研究を進めた（表1）。

表1 調査対象の経験年数及び、担当クラスと調査日

	保育者A（熟達保育者）	保育者X（非熟達保育者）
経験年数	22年目	1年目
担当クラス	3歳児T組	4歳児F組
調査日の園児数	19名	18名
調査日	令和6年1月25日	令和6年1月25日

(3) 手遊び歌『ペンギンマークの百貨店』について

調査対象とした『ペンギンマークの百貨店』は、歌詞に合わせてペンギンの真似をしたり、「ドッキンドッキンワクワク」の箇所でも両脇を開く動きをしたり、売り場に応じて化粧をする真似をしたり、おもちゃを探す真似をしたりして楽しむ手遊び歌である。一般的には百貨店の1階が化粧品売り場で、その後2階、3階、と様々な売り場で買い物をして、最後の5階が映画館になっており、「静かにしましょ、しー」という流れで終わることが多い。各階の売り場やそこでの演技方は保育者によってアレンジされることもある。

1.ペンギンマークのひゃっかてん      1 かい は おけしょうやさん それ  
 2.ペンギンマークのひゃっかてん      2 かい は おもちゃやさん それ

I —————

I ————— II ————— III —————

ドッキンドッキン ワクワクー      おけしょうしましょ (パタパタ)  
 ドッキンドッキン ワクワクー      どれにしようかな (これ!)

図1 『ペンギンマークの百貨店』（市販の楽譜をもとに筆者が移調・歌詞の変更をした）

(4) 調査方法

①動画の撮影と子どもの夢中度の得点化

各クラスにビデオカメラを設置し、手遊び歌実演の様子を撮影した。その録画映像を視聴し、1コーラス目の終了時点、2コーラス目の終了時点、3コーラス目の終了時点、4コーラス目の終了時点、5コーラス目の終了時点の一人一人の子どもの夢中度を、「とても楽しんでいる・遊びの世界に入り込んでいる」「(まあまあ)楽しんでいる」「普通・ニュートラル」「(あまり)楽しんでいる」「他のことをしている・無視している」の5段階で評価し、5点から1点の得点をつけた。コーラス毎にクラスの子どもの平均得点を算出し、その保育者のコーラス毎の子ども

の夢中度とした。「終了時点」は終了間際の約5秒の子どもの姿をもとに判断した。

これを筆者（大学教員）と、保育学生（4年生）7名の8名が各自で行い、各保育者のコーラス毎の子どもの夢中度の平均値を出し、*t*検定を行った。

## ②インタビュー

調査対象となった保育者には、保育終了後にインタビューを行い、手遊び歌実演の際の意図について聞き取りを行った。

## （5）倫理的配慮について

本調査にあたり、録画をした動画はデータ処理のためにのみ使用すること、それに伴い、本調査において対象となる教員・幼児らについての個人情報の保護、身体的、心理的リスクへの対応等について対象幼稚園に研究計画書を提示し説明を行い、対象となる教員本人が不利益を被ると判断した際には調査対象として取り上げないなど、了承を得た上で調査を行った。

## 3. 調査結果

### 1) 熟達保育者Aの手遊び歌実演の様子と子どもの夢中度

1月25日、保育者Aは片付けが終わった場面で手遊び歌の実演を行った。戸外で遊んだ子どもが徐々に保育室に入ってきたり、服が汚れてしまったり着替えをしたりするなど、手遊び歌開始時には全員が揃っていたわけではないが、19人中15人が保育者の前の床に座った時点で、保育者Aは手遊び歌を開始した。ここでは各コーラスの保育者Aの手遊び歌実演の様子とともに子どもの夢中度について調査結果を示す。

#### ①1コーラス（1c）目（化粧品売り場）

保育者Aは、手遊び歌の1cの開始時から図1のⅠ、Ⅱの部分は、歌のリズムに合わせて振りを行う。その間、多くの幼児が保育者の動きを注視しながら保育者の動きを真似している。保育者Aは①Ⅲの部分では、化粧用のパフを使ってファンデーションを叩く真似をする。それを見た子ども達は「きゃー」「えー」などと声を出して笑う。それに合わせて保育者Aも頬に手を当てて「うふふ」と声を出して笑う。子ども達はそれを見てさらに笑顔になる。

その後、服が汚れたままの子どもがいることに気づき、①「ちょっとごめん、〇〇くん、着替えてからきたほうがいいな」と言い、着替えを促す、もう一名着替えが必要な子どもがおり、②「着替えてから来て」などと促す。着替え始めたことを確認して「せーの」と2cを始める。

#### ②2コーラス目（ペット屋）

保育者Aは1cと同様に、2cもⅠ、Ⅱの部分は歌のリズムに合わせて振りを行う。その間、多くの幼児が保育者の動きを注視しながら保育者の動きを真似している。2cは「ペット屋さん」にアレンジされており、Ⅱの部分では「チワワを抱っこ」と歌う。その後、②Ⅲの部分で

「ぎゅー」とチワワを抱く振りをする。それを見た子どもは「あー」「えー」などと言いながら笑顔になる。保育者Aは続けて抱きしめた犬に頬擦りをする振りをしながら「この可愛い犬連れて帰ろうかしら、ふふふふ」と言う。子どもは笑顔でその様子を見ている。一人の子どもが「チワワって何？」と尋ねたため、保育者Aは「チワワってちっちゃい犬のお名前」と答える。帽子を被ったままの子どもが保育室に戻ってきたため、③「〇〇君、帽子、置いてきまーす」と声をかける。その後、④「じゃ、3階に行きまーす、せーの」と3cを始める。

### ③ 3コーラス目（スポーツ店）

3c目も同様に、保育者AはI、IIの部分は歌のリズムに合わせて振りを行う。その間、多くの幼児が保育者の動きを注視しながら保育者の動きを真似している。3階はスポーツ店で、IIの部分を「ホームラン打つぞ」と歌い、③IIIの部分では勢い良く「カキーン」とバットを振ってホームランを打つ振りをする。その後、「行った行った行った…」と言いながら手をひさしのように額に当てボールの行方を追う真似をし、「入ったー」と両手を拳にして高く上げるポーズをする。子ども達はそれを見て「えー」と声を出したり、笑ったりする。手が汚れているのにそのまま戻ってきた子どもがいたため、⑤「〇〇ちゃん、ちょっとごめん、石鹸で洗ってきて、石鹸で洗ってきて、みんなで仲良しで遊ぶから」と声をかける。その後、「はい、それでは、4階に参りまーす、せーの」と4cを始める。

### ④ 4コーラス目（電気屋）

4cも同様に、保育者AはI、IIの部分は歌のリズムに合わせて振りを行う。その間、多くの幼児が保育者の動きを注視しながら保育者の動きを真似している。4階は電気屋さんで、IIの部分を「携帯電話」と歌う。その後④IIIの部分では「ピピピ」と言いながら、スマートフォンをクリックする振りをする。それを見た子ども達は動きを真似る。保育者Aがそのスマートフォンを耳に当てると子ども達も同じ動きをする。保育者Aは「もしもし？あ、園長先生、今日はお掃除ありがとうございますございました。園長先生がT組の前のお庭にお花を植えてくれたんですよ…」などと通話（の振り）を始める。この園長先生との通話はしばらく続く。（これは、この時点で着替えている幼児が2名、手を洗っている幼児が2名いるため、全員が戻ってきてから5cを始めようというA保育者の配慮である。この後さらに園長先生との通話が終わると、スマートフォンで天気予報を調べるなどして待つ。）着替えていた子どもが着替え終わった所で「それでは5階に参りまーす、せーの」と5cを始める。

### ⑤ 5コーラス目（レストラン）

5cも同様に、保育者AはI、IIの部分は歌のリズムに合わせて振りを行う。その間、多くの幼児が保育者の動きを注視しながら保育者の動きを真似している。5階は映画館ではなく、レストランにアレンジされており、IIの部分は「お子様ランチ」と歌う。⑤IIIの部分で「いただきます」と手を合わせる。それを見た子ども達も手を合わせ、笑いながら「いただきます」の振りをする。それを見た保育者Aは右手を皿のようにし、左手でスプーンを持つようにして、

何かをモグモグと食べる振りをする。それを見た子ども達はさらに笑顔になり、「えー」と言ったり、後ろに転げたりする。保育者Aは「おいしい」と言い、笑う。

『ペンギンマークの百貨店』はここで終わるが、まだ手洗いから帰ってこない子どもがいたため、別の手遊び歌を始める。

以上のように、保育者Aはこの手遊び歌の基本的なパートである図1のⅠ、Ⅱの部分ではリズムに合わせて進行するが、Ⅲの部分で間をとったりアドリブを入れたり子どもに話しかけたり、身支度が終わっていない子どもに声をかけたりしていることがわかる。

どのコーラスにおいても、Ⅰ、Ⅱの部分では、保育者の動きに合わせて振りを真似ている子どもが多くおり、更に保育者の方を注視していることから、保育者と子ども間で身体的同調が起きており、ノリの共有が生まれていることがわかる。また、Ⅲの部分で保育者Aによる様々なアドリブや間が取り入れられることにより、ノリの共有が中断する、宙吊りが起きていることも確認できる。

それぞれのコーラスの終了時の子どもの夢中度を、評価者8人が評価した得点の平均を表2に示した。評価者の評点の信頼性を検討するために、重み付けカッパ係数を求めたところ評価者間の評点は非常に高い一致度であることが確認された ( $k=.937$ )。

表2 3歳児Aクラスの各コーラス終了時点の子どもの夢中度の平均値

	1c	2c	3c	4c	5c
平均	4.02	3.95	4.07	3.64	3.99
標準偏差	0.44	0.41	0.35	0.36	0.32

(小数点第3位で四捨五入)

## 2) 非熟達保育者Xの手遊び歌実演の様子と子どもの夢中度

1月25日、保育者Xは、降園前の集まりが始まる前に手遊び歌を実演した。ほとんどの子どもが戸外で遊んで帰ってきており、手を洗ったり着替えたりして、18人中16人が保育者の周辺で椅子に座った状態で手遊び歌を開始する。ここでは各コーラスの保育者Xの手遊び歌実演の様子とともに子どもの夢中度について調査結果を示す。

### ① 1コーラス目（化粧品売り場）

保育者Xが1cを始めると、保育者の方を見て動きを真似しようとする子どももいるが、1人の子どもa児が立ち上がり、保育者Xと子ども達の間立ち、保育者の真似をしようとする。それを見て3人の子どもが立ち上がり、a児を見ながら手遊び歌を行う。他にも、よそ見をしている子ども、保育者Xの方を見ているが無表情で手遊び歌をしていない子ども、などもある。2人の子どもが身支度を終えていなかったが、1cの最中に支度を終えて椅子を持って座る。⑥保育者Xは図1のⅢの部分で「パタパタ」とパフを叩く振りをした後に、そのテンポを継続した

まま、楽譜通りに2cを始める。

② 2コーラス目（スポーツ店）

保育者Xは、2cでも同様にⅢの後に間を取らずに行う。子どもaは立ったまま、子ども達の方を見ながら手遊び歌をしている。立っていた他の子どもは席に戻って座って手遊び歌をしている。保育者Xの方を見て動きを真似しようとする子どももいるが、よそ見をしている子どもや、保育者Xを見ているが無表情で手遊び歌をしていない子ども、下を見ていたり、自分の手を触ったりしている子どもがいる。2階はスポーツ店で、Ⅱでは「ホームラン打つぞ」とバットを持って構え、Ⅲで「カキーン」とホームランを打つ振りをする。⑦Ⅲの後に間やアドリブ、子どもとのやりとりは挿入されず、テンポを継続したまま、楽譜通りに3cを始める。

③ 3コーラス目（ペット屋）

保育者Xは、3cでも同様にⅢの後に間を取らずに行う。子どもaは3cの途中で自分の席に戻る。次第に保育者Xの方を見ている子どもが増えてくるが、よそ見をしている子ども、保育者Xの方を見ているが無表情で手遊び歌をしていない子どもがいる。3階はペット屋で、Ⅱでは「チワワを抱っこ」、Ⅲで「ぎゅー」と言いながら抱きしめる動きを行う。⑧ⅡからⅢへの移行に際しても間はなく、テンポを維持したまま「ぎゅー」を行い、そのテンポを維持したまま4cへ移行する。

④ 4コーラス目（本屋）

保育者Xは、4cでも同様にⅢの後に間を取らずに行う。全員座って保育者Xの方を見て動きを真似しようとする子どももいるが、よそ見をしている子ども、保育者の方を見ているが無表情で手遊び歌をしていない子どもがいる。4階は本屋で、Ⅱでは「どれにしようかな」と歌いながら、子ども達を指さしながら選ぶ振りをする。⑨Ⅲで「これ」と言いながら、本を選び抜く振りをする。この際にもテンポの揺れはなく、テンポを維持したまま5cに移行する。

⑤ 5コーラス目（映画館）

5cの最中も全員座って保育者Xの方を見て動きを真似しようとする子どももいるが、よそ見をしている子ども、保育者の方を見ているが無表情で手遊び歌をしていない子どもがいる。5階は映画館で、Ⅱでは「静かにしましょ」と歌い、ⅡからⅢに移行する際にリタルダンドをかけ、⑩Ⅲの「しー」で人差し指を鼻に当て、小さな声で「しー」を発する。この「しー」にはフェルマータがかけられている。「しー」と言って5cは終わるが、終わった直後に隣の子どもに話しかける子どもや、後ろを見る子どもなどがある。

以上のように、保育者Xは、基本的には1cから5cまで一度もテンポを変えたり間をとったりアドリブを入れたり子どもとのやりとりを入れたりせずに手遊び歌を通してることがわかる。最後の5cの終了時点の「しー」のみ、テンポを変えている。また、手遊び歌の最中によそ見をしていたり、手遊び歌をしていない子どもが多くいたりすることも特徴である。

保育者Xの手遊び歌実演においては、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、の部分を通して、ノリの共有が起きている子どももいると捉えることができる。しかし、アドリブや間が取り入れられず、ノリの中断が起きないため、宙吊りの状態がないことが特徴として挙げられる。

それぞれのコーラスの終了時の子どもの夢中度を、評価者8人が評価した平均得点を表3に示した。

表3 4歳児Xクラスの各コーラス終了時点の子どもの夢中度の平均値

	1c	2c	3c	4c	5c
平均値	2.70	2.73	2.64	2.55	2.09
標準偏差	0.28	0.27	0.22	0.27	0.31

(小数点第3位で四捨五入)

### 3) 子どもの夢中度の比較

#### (1) 保育者Aと保育者Xの比較

両保育者の手遊び歌実演中の子ども達の夢中度の得点の平均値を比較した。これらの平均値の差が統計的に有意かを確かめるために有意水準5%で両側検定のt検定を行ったところ、保育者Aの1コーラス目(1c)と保育者Xの1コーラス目で、 $t(14)=6.26, p<.01$ となり有意差が見られた。同様に、2コーラス目(2c)では、 $t(14)=5.99, p<.01$ となり有意差が見られた。3コーラス目(3c)では、 $t(14)=9.02, p<.01$ となり有意差が見られた。4コーラス目(4c)では、 $t(14)=6.56, p<.01$ となり有意差が見られた。5コーラス目(5c)では、 $t(14)=11.71, p<.01$ となり有意差が見られた。

このことから、熟達保育者Aと非熟達保育者Xとでは、『ペンギンマークの百貨店』の手遊び歌実演中の、どのコーラスにおいても、子どもの夢中度に統計的に有意な差があり、熟達保育者の方が手遊び歌実演中の子どもの夢中度が高いことがわかった。

#### (2) コーラス毎の比較

図2は、2名の保育者それぞれにおける各コーラスの夢中度の変化を示したものである。混合計画の2要因分散分析を行った結果、保育者要因( $F(1, 14)=89.525, p<.001, \text{partial } \eta^2=.865$ )、コーラス要因( $F(4, 56)=7.050, p<.001, \text{partial } \eta^2=.335$ )、交互作用( $F(4, 56)=6.689, p<.001, \text{partial } \eta^2=.323$ )のいずれも有意差が

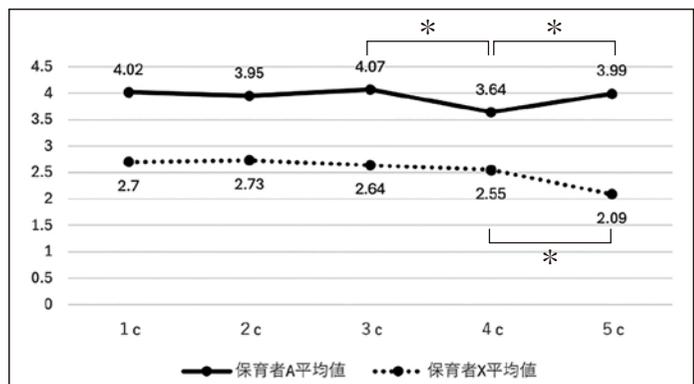


図2 保育者Aと保育者Xのコーラス毎の夢中度の変化

みられた。

Holm法による下位検定を行った結果、保育者Aにおける3cから4cへの低下( $p=.001$ )および4cから5cへの上昇( $p=.002$ )、保育者Xにおける1cと5c( $p=.002$ )、2cと5c( $p=.003$ )、3cと5c( $p=.002$ )、4cと5c( $p=.001$ )の差（いずれも5cの低下）が有意であった（図2\*印）。

以上のことから、保育者Aは3cから4cにかけて子どもの夢中度が有意に下がり、その後4cから5cにかけて夢中度が有意に上がっていることがわかった。また、保育者Xは4cから5cにかけて夢中度が有意に下がっており、5cのみ他のコーラスと比較して夢中度が有意に低くなっていることがわかった。

#### 4. 考察

##### 1) 熟達保育者Aの手遊び歌実演の方法

保育者Aは、各コーラスのⅢ（図1）の部分で間を取り、アドリブを入れながら演じている（下線部①②③④⑤）。保育者Aが全てのコーラスにおいてこのようにアドリブを入れることによって、この手遊び歌にノリの共有、宙吊り、宙吊りの解消が起き、1コーラスから5コーラスへとその反復がなされていることがわかる。

The image shows a musical score for the song 'Penguin Brand Department Store'. It is divided into two parts, (i) and (ii). Part (i) is the common rhythm section, and part (ii) is the section with improvisation and '宙吊り' (suspension). The score is written in 4/4 time and includes lyrics for two different vocal parts.

Part (i) lyrics:  
 1.ペンギンマークのひゃっかてん 1 かい は おけしょうやさん それ  
 2.ペンギンマークのひゃっかてん 2 かい は おもちゃやさん それ

Part (ii) lyrics:  
 ドッキン ドッキン ワクワクー おけしょうしましょ (パタパタ)  
 ドッキン ドッキン ワクワクー どれにしようかな (これ!)

図3 『ペンギンマークの百貨店』におけるノリ共有と宙吊りの構造

図3は、『ペンギンマークの百貨店』の楽譜をノリの共有部分（i）と宙吊り部分（ii）に分けたものである。iにおいて保育者Aが演じる手遊び歌は楽譜通りに進行し、この間テンポも変わらずに安定して進行する。これにより、子ども達は保育者Aの演じる身体の動きを模倣しながら身体を動かす。そのため、iの部分では保育者Aと子ども達の間でノリが共有されることとなる。

それがiiの部分で保育者のアドリブが入ることにより、ノリは中断され、保育者Aがどんな言葉を発するのか、どんな動きをするのか、どんな表情をするのか、という宙吊り状態が生まれる。これは保育者Aにとっても、子ども達がどんな反応をするのか、を楽しみに待つという意

味で同様であり、双方にとって宙吊り状態であると言える。その間合いは下線部①から⑤でそれぞれ異なり、子どもの様子に合わせて変化していることがわかる。この宙吊り状態の間、子どもと保育者Aはその宙吊り状態を楽しみながら、次のコーラスへ移行することも楽しみに待っている状態が続く。そして、保育者Aの波線部④「じゃ、3階に行きまーす、せーの」のような発言と共に次のコーラスに移行することで、宙吊りが解消され、再びノリの共有が始まっている。

この『ペンギンマークの百貨店』の手遊び歌は、本来はiiの部分で何を行うかが指示されており、楽譜上ではすぐに始点に戻り、次のコーラスへ移行する構造になっている。そのまま実演すると、保育者と子どもの間でノリは共有されたとしても宙吊りが起こる構造にはなっていない。

ところが、保育者Aはiiのパートを表情豊かに、子ども達とのやりとりを取り入れたり、その都度アドリブを入れたりしながら演じることで、本来この曲目が持ち合わせていない、「ノリの共有・宙吊り・宙吊りの解消」という構造を発生させていることがわかる。

## 2) 非熟達保育者Xの手遊び歌実演の方法

保育者Xは、保育者Aとは対照的に、1cから4cまで、一度もテンポを変えずに演じており、図1Ⅲの部分でもアドリブのような動きは行なっていない。唯一5cにおいて、Ⅱの部分でリタルダンドをかけ、Ⅲの部分でフェルマータをかけている。これは全体の終わりであることを意識し、最後を印象的に終わらせようとしたことで起きたテンポの変化だと考えられるが、これが毎回同じように実演されていると推察され、アドリブとは考えにくい。つまり、保育者Xの実演には子ども達との間に一部「ノリの共有」は起きているが、「宙吊り」が起きていないと言える。

## 3) 子どもの夢中度の差の考察

保育者Aが手遊び歌をしている最中はほとんどの子どもが保育者の方を注視しながら手遊び歌を行っている。また、保育者Aがアドリブを行う度にその様子に驚いたり、笑って見たりしながら保育者の動きや表情を楽しんでいる。一方で、保育者Xが手遊び歌をしている最中は、よそ見をしたり、保育者Xの方は見ているが手遊び歌を行っていない子どもがいる。楽しんでいる子どももいるが、楽しんでいる子どもが目立つ状況がある。

それは夢中度の得点からも確認することができる。保育者Aと保育者Xを比較すると保育者Aの方が子どもの夢中度が統計的に有意に高いことがわかった（図2）。これは、保育者Aがこの手遊び歌において、本来は想定されていないアドリブを入れながら実演することにより、ノリの共有から宙吊り、宙吊りの解消が起きているからであると考察される。この手遊び歌の場合、図3のiの部分でノリの共有が起き、iiでそのノリが宙吊りにされ、またiに戻る。この繰り返しは、子どもにとっては、「今度は先生はどんなことをするのか？」という期待、「やっぱり面白い顔をしている」「楽しい動きをしている」という宙吊りにされた期待の充実、そしてその後訪れる「再び先生とリズムと動きが揃って一緒に歌える」という一体感、を得ることにつながっ

ている。期待が満たされ、満足して次に起きることが楽しみになれば、自ずと子ども達は保育者の方に注目し、気持ちを寄せることにつながる。

保育者Xの場合、毎回同じテンポで、同じ内容で、同じ振りで手遊び歌が繰り返されている。アドリブもないため、子ども達にとっては、「同じことの繰り返し」が起きており、飽きているとも言える。加えて、ノリの共有から宙吊り、宙吊りの解消という遊びの構造が生まれていないため、子どもはその場の手遊び歌自体にも楽しみを見出せておらず、夢中になっている子どもが少ない状態が続いている。

これに関して、保育者Xのクラスの子どもの方が夢中になりにくい状況だったのかということ、そうとも考えにくい。保育者Aのクラスでは手遊び歌の最中に、戸外から保育室に戻ってきた子どもや、着替えが必要な子どもがおり、全員が揃って手遊び歌を楽しむ状況が続いているわけではなく、子どもが出入りしている状況である。手遊び歌実演のコーラスの合間に、保育者Aは波線部①のように「ちよっとごめん、〇〇くん、着替えてからきたほうがいいな」と声をかけている。他にも波線部②③⑤でもコーラスの合間に声をかけていることから、保育者Aのクラスは、全員が集中しやすい条件が揃っていたわけではない。一方、保育者Xのクラスの子どもの達も、開始時点では身支度が終わっていない幼児もいるが、1cの途中で全員が座っている。全員が椅子に座って保育者Xの方に体が向いていることを踏まえると、むしろ保育者Xのクラスの方が手遊び歌に夢中になる条件は揃っていたと考えられる。

図2の\*印からもわかるように、保育者Aも4cにおいて一旦子どもの夢中度は下がっており、常に保育者Xよりは高い夢中度を維持しているものの、子どもの状況によっては夢中度が下がる場面も見られた。これについては、保育室に戻ってくる幼児や着替えが必要な幼児がまだ戻ってきておらず、この手遊びを長引かせる意図から、4cでは波線部④に見られる通り、「携帯電話」というアドリブから園長先生との通話がしばらく始まっており、これまで取り組んだことのない振りであったため、子ども達が、振りを真似ればよいのか見ればよいのか戸惑ったためであると考えられる。ただし、4cで一旦下がった夢中度も5cでは回復し、手遊び歌終了時には高い夢中度になっていることがわかる。

一方、保育者Xの場合、5cにて最後の部分で「静かにしましょ、しー」という言葉と振りを行い、子ども達を静かにさせ保育者の方に集中させようというメッセージを出しているにも関わらず、子どもの夢中度が1c～5cの中で最も低いという点も興味深く、保育者の意図や手遊び歌のもっている効果とは逆の状態が生まれていることがわかる。これについては、前述の通り保育者Xの手遊び歌に遊びの構造が含まれずに単調な歌と振りの繰り返しになっていることが原因と考えられる。

また、両保育者には「手遊び歌にはどのような意識で臨んでいたか」という質問をしている。保育者Aはそれに対し、「一斉活動の前なので、これから始まることに期待を持って集まって来られるようにしたかった」「この時間が子どもにとって楽しい時間になるようにしたかった」「気

持ちが逸れそうな子どもには目を合わせるようにしていた」「そこにいる人数や、身支度の具合など状況を読み取りながら行っていた」「みんなで集まったら楽しいことがあると覚えることが一番大事」「自分のアドリブを受けて子どもが笑うように、またその子どもの姿を受けて自分も会話を挟むようにしていた」と述べている。一方保育者Xは、「子どもを落ち着かせたかった」「（私が）焦っていた」「席に戻らせ、支度をさせ、みんなが集まれるようにしたかった」「a児は構えば構う程エスカレートするので、あえて関与しなかった」「実演に際し、工夫した点は特にない」と述べている。

ここから考えられることは、子ども達の手遊び歌への夢中度は、手遊び歌実演の方法によってのみならず、手遊び歌に対する保育者の意識によっても左右されるということである。保育者Aのクラスも保育者Xのクラスも、集まって手遊び歌を始める際には全員が集まっているわけではなく、全員が静かに集中できるような条件が揃っていたわけではない。しかし、保育者Aは、手遊び歌の時間が子どもにとって楽しい時間であることを第一に考え、クラスの状況を見ながら、保育者Aと子ども達との間で『ペンギンマークの百貨店』がより楽しくなるように意識をしていた。その結果、手遊び歌実演の際にアドリブを入れることで、ノリの共有と宙吊り、宙吊りの解消が生まれ、子ども達の夢中度が上がったと考えられる。

一方の保育者Xは、集まってきていない子どものことや、立っている子どものことなどを「落ち着かせ」「席に戻らせ」「集まれる」状況にしたいという意識が強かった。また、手遊び歌実演の方法についての工夫も特に意識されていなかった。その結果、保育者Xの手遊び歌にはアドリブがなく、常に一定のリズムで繰り返されることとなり、ノリの共有と宙吊りという「遊び」の構造が含まれない。そのため、保育者Xの『ペンギンマークの百貨店』は「手遊び歌」ではなく、5cの「静かにしましょ、しー」に向かって進行する「歌」となっていると考えられる。それにより、子ども達は繰り返しに飽き、よそ見をしたり、立ってみんなの方を見ながら行うなどの別の楽しみ方を見出そうとしたりする動きが生まれ、夢中度が下がったのだと考えられる。

## 5. まとめ

本研究では、まず、熟達保育者と非熟達保育者の行う手遊び歌の最中の子どもの夢中度を比較した。その結果、両者で子どもの夢中度に差があることが明らかとなった。また、両者の手遊び歌の実演方法の違いを「ノリの共有」の視点から考察した。その結果、熟達保育者は手遊び歌実演の際には手遊び歌で遊ぶ時間が子どもにとって楽しい時間になるように意識をしており、手遊び歌にノリの共有と宙吊り、宙吊りの解消という遊びの構造が生まれ、そのことにより、子どもの夢中度が上がっていると考えられる。反対に、非熟達保育者は、子ども達を集中させたい、席に着かせたいという思いがあり、手遊び歌が一定のリズムのまま変化せず、ノリの共有と宙吊りが起きず、子どもの夢中度が低かったと考えられる。これにより、手遊び歌実演の際の子どもの夢中度が、保育者の手遊び歌実演の際の「ノリの共有と宙吊り、その解消」に影響を受けている

ということ考えることができる。

保育者Xは保育経験1年目の非熟達者であり、日々の生活の中で、クラスで集まる際に徐々に集まってくる子ども達に時間差が生まれることや、集まった際にも様々な楽しみ方をする子どもがいることなどについて慣れていない。更に、どのクラスにも個別の支援が必要な子どももいる。したがって集まった際に全員が保育者に向けて集中する状況を作ることが難しいことであることは当然のことである。また、そういった子ども達を「席に着かせて静かにさせなければならない」という意識が働くことも当然である。養成校の学生であってもそれは同様で、実習などで接する子ども達に対して同様の意識で臨む場面が容易に想像できる。しかし、保育者Aのクラスでも同様な状況があったにも関わらず、子ども達は保育者の方に気持ちを向け、手遊び歌そのものを楽しんで夢中になっている。同じような子ども達に対して、楽しい時間を作ろうとした熟達保育者のクラスは子どもの夢中度が高く、静かにさせようとした非熟達保育者のクラスは子どもの夢中度が低かったのである。

これは、手遊び歌実演の際、熟達保育者が子ども達と身体的同調を伴いながら気持ちを通わせ、互いに楽しい時間を生み出すことが可能なのは、熟達保育者が、手遊び歌の時間を楽しみ時間にしてしようという意識を持ち、その結果その実演の方法も「ノリの共有・宙吊り・宙吊りの解消」が起きるような方法になっているためであるということを表している。

保育者と子どもとの間で行われる手遊び歌の時間は、保育者が子どもに対して一方的に楽曲を習得させる時間ではなく、また、手遊び歌は、単に次の活動のために子どもを静かにさせたり保育者の方に注目させたりするための道具でもない。そのような「静かにさせるため」の手遊び歌がなくなる原因の一つは、「静かにしましょ、しー」や「手はお膝」で終わる手遊び歌があるために、それを効果的に使い子どもを静かにさせることが保育者のスキルであるかのように捉えている保育者がいるからであろう。手遊び歌が「手遊び歌」である以上、そこには遊びの要素が含まれている。その要素の一つである「ノリの共有・宙吊り・宙吊りの解消」を保育者自身が楽しみながら実演することで子ども達は夢中になり、保育者に対して期待を寄せ、結果的に静かになったり注目したりするのである。決して、静かにさせたり注目させたりするために手遊び歌の時間があるわけではない。

保育者養成に当たっては、手遊び歌の指導において、それぞれの手遊び歌が持つ特性と構造を理解し、効果的な実演方法について理解を深め、実践を重ねられるよう指導していく必要がある。ただし、手遊び歌には様々なものがあり、岩田（2017）の示すように、「ある種の」手遊び歌に、ノリの共有と宙吊りが含まれているが、全ての手遊び歌が本研究で取り上げたような構造であるとは限らない。本研究で取り上げた『ペンギンマークの百貨店』は、本来ノリの共有と宙吊りが起こることを想定されているわけではなく、ノリの共有と宙吊りの構造が潜在していると考えることができる。今後は種々の手遊び歌の構造をノリの共有の視点から整理し、手遊び歌実演の際の留意点やそれによる子どもの姿について更に研究を進めていきたい。

## 謝辞

本研究の実施にあたり、調査にご協力いただきました、東京都T幼稚園の先生方、また、研究への協力をご快諾いただきました同園長先生に、深く感謝申し上げます。また、測定のお手伝いをいただきました中野ゼミの学生に深く感謝申し上げます。

## 【注】

- 1) 手遊び歌に関しては、明確な定義づけがなされておらず、手だけでなく、腕や足など全身に及ぶ動作が含まれているものや、言葉にわずかなリズムと抑揚がついているようなものも手遊び歌と表現されている。児嶋ら（2022）はそのような多様性を示した上で、手遊び歌を「大掛かりな場所の移動をせずに行う手指や全身の動きを伴う遊び歌」としている。本稿では保育者の歌の歌い方やリズム変化に着目して分析を行うという趣旨から、児嶋らの定義に倣って研究を行う。また、その他の歌を伴わない「手遊び」も存在するため、一般的な「手遊び」とこれを区別する。

## 【参考文献】

- 岩田 遵子（2008）「逸脱児が集団の音楽活動に参加するようになるための教師力とは何か - ノリを読み取り、ノリを喚起する教師力」音楽教育実践ジャーナル 5（2） pp.12-18
- 岩田 遵子・小川 博久（2015）「近代教育制度における教育実践の一方方向性克服の試み - 「遊び保育」における手遊び実践の意義」東京都市大学・人間科学部紀要（6） pp.11-33
- 岩田 遵子（2017）「保育実践における手遊びの意義 - 「保育文化」としての手遊びの重要性 -」東京都市大学人間科学部紀要（8） pp.23-36
- 楽譜ストア Piascore 『ペンギンマークの百貨店（初級編）』  
<https://Bore.piascore.com/scores/125869>（令和5年10月25日取得）
- 笠井キミ子・久原広幸・坂田万代・横山浩平（2015）「保育教育における手遊び歌についての一考察」中村学園大学・中村学園大学短期大学部 研究紀要 第47号 pp.1-11
- 児嶋輝美 釘宮貴子（2022）「保育現場における手遊びの伝承とその意味 - 作者不詳の作品に見る手遊び歌の変遷 -」徳島文理大学研究紀要 第104号 pp.43-54
- 中野圭祐（2024）「手遊び歌実施時のテンポの揺らぎについて：人的環境としての保育者の視点から」國學院大學人間開発学研究（15） pp.17-34
- 西村清和（1989）『遊びの現象学』勁草書房 pp.33-47

（なかのけいすけ 國學院大學人間開発学部子ども支援学科助教）